

もらいたいことは、学校五日制に伴って、指導内容の根本的な削減である。中学校の「荒れ」が問題になった、文部省がやったことは「サツカーくじ」の筒元になったことだけである。われわれ教師の希望はいつも打ち砕かれているが、あきらめず文部省に声を上げてゆきたい。

(付記)

8月5日、中央教育審議会の小委員会で、学級編成や教職員の配置を地方自治体にゆだねる答申の素案をまとめた。マスコミ等では、「四十人学級」を事実上、崩すものとして報道されている。

しかし、例として、事務職員を減らして教員に替えることをあげているように、教職員の抜本的な配置替えにはなっていない。早急に「三十人学級」養護教員の複数配置などを実現することが中学校の「荒れ」を解決する道であろう。

(こ)ばやしあきら・新潟市山潟中学校



親が先生に困るゝ小学一年生ゝ

本誌先号で三輪教授は、「キレる」子どもの陰に「キレる」教師の問題が隠れているようだ。と今の子どもたちの強い教師不信状況を紹介された。新潟市のある小学校一学年PTA委員長をした母親からそれを裏づけるような例を聞いた。

経験二十余年の担任女性教師は、学級PTAの席でたくさんの紫色のあざがある自分の腕を示して、「言うことをきかない、反抗する、こんな小学一年生は、見たことがない」「教室で騒いで授業にならない」と。じつさい授業中「家に帰りなさい」と叱られた子どもが裸足のまま帰ったという。

困るのは、家庭に口をつっこむことで、「A君が乱暴して、落ち着かないのは、あなたと風呂に一緒にいるなどのスキンシップが足りないからで、パートをやめるべき」とまで迫られ、事実やめて悔やんでいる人もいるとの事。忘れ物防止には、「寝る前に子どものカバンを点検するのは、親の常識です。忙しい私だってそうやってきました」と、その励行を求めるなど。

(Y)